

# 編集委員会便り

エネルギー・資源の編集の目玉として、毎号の特集の決定は編集実行委員会の最も苦心する所です。目標は勿論読者の関心があるテーマで、内容が読者の知識の糧になるものでなければなりません。一方編集側としては決ったテーマの項目を7～8篇に絞り、最適任の方に執筆を御願する段取りになりますが、問題の重要性から出来るだけ執筆に時間的余裕を見るように務めて居ります。その為には掲載誌の発行月から約9ヶ月以前に編集企画を定めなければなりません。即ち9ヶ月後に読者に適切なテーマであったと感じて載けることを予測し、具体的な決定をしなければなりません。このタイミングを合わせるのが苦心を要する所であります。

今月の特集「燃焼と環境」は既に昨年8月にテーマの意見が出され、具体的企画の担当者が決められました。次回の10月の委員会で項目、執筆者などの具体案が提示され、各委員間の意見調整を経て決定に至るわけであります。今回は林委員長自ら豊橋技術科学大学大竹一友教授に全般企画および執筆の依頼をされました。この委員会決定に基いて事務局から正式に執筆依頼を御願する運びとなります。5月号の原稿締切りは3月10日ですが、この間約4ヶ月あるので先づ先づ執筆者にも御了解載けるものと思えます。

原始人が人類として発展し得たのは、一にエネルギー源を開発して生活環境を良くし得た事によるものと思われまふ。エネルギー開発の始まりは火の利用であり、この事の重要性は今日に至るまで変わっていません。火の利用—熱エネルギーの利用は、地球が酸素を含む大気を持つ環境にある限り、炭素、水素およびこの二者の化合物である多種多様な炭化水素類の燃焼によっています。熱機関による熱→機械エネルギー変換は文明を画期的に進歩発展させ、更に電力エネルギーは最も利用に便利でかつクリーンなエネルギーとして一層これを加速しました。しかしその電力も原子力、水力

発電によるもの以外は火力発電など熱エネルギーの変形で、実に世界の一次エネルギー構成の88%は化石燃料であります。幸にして我が地球は地表のバイオマス系炭化水素、地下資源の所謂化石燃料即ち石炭、石油、石油ガス系炭素、炭化水素に恵まれ、これ等が今日の人類の繁栄を見るに至った源泉であります。しかしこれ等のエネルギー源は畢竟有限な資源であり将来必ず涸渇するという警鐘が打鳴らされて居り、さらに茲数年前から地球規模の環境悪化が近未来の重大問題として取上げられる様になりました。この深刻な問題は、燃焼生成物の二酸化炭素による地球温暖化問題、燃焼廃ガスに含まれる窒素酸化物、硫黄酸化物による酸性雨などの大気汚染問題であります。世界の一次エネルギー構成の88%を占める化石燃料がエネルギーを発生する段階で必ず二酸化炭素を生成します。その量は世界で年間推定65億炭素トンという膨大なものとされています。この辺の事情を肝案すると世界温暖化および大気汚染防止対策としては、先づ燃焼による熱エネルギー発生過程で、エネルギーの有効活用、省エネルギー技術の確立を図ることにより、二酸化炭素および有害窒素酸化物等の有害大気汚染物質発生量を極力減少させることが実際の解決策の第一歩であります。

この見地から今月号の特集として「燃焼と環境」を取上げて特集を組むこととしました。そしてその企画の具体的立案と総論を浜松技術科学大学大竹一友教授に御願することとし、各論として燃焼技術の進歩、燃焼に伴う環境悪化とその防除対策、省エネルギー化による環境浄化、燃焼の環境影響について各御専門の執筆者を御願致しました。この環境問題に焦点を当てた各執筆者の貴重な論説が今後の指針として役立つことを期待している次第であります。

服 部 正 策  
(湯浅電池(株)相談役・最高技術顧問)